

出版界にみる「古河」

アテネオリンピックに沸いた2004年も、はや師走を迎え、今年の10大ニュース等が語られる時節となりました。皆さんが考える今年のトップニュースは、やはりオリンピックでしょうか？

オリンピックという華やかな祭典があった一方で、社会全般の動きを見ると、戦争、台風、地震等々、決って明かかったとは言いがたい今年ですが、こと古河については、明るいニュースがありました。えっ、「そのことはもう知ってる！鷹見泉石関係資料の重要文化財指定でしょ。それにここは歴史博物館じゃなくて、文学館の欄じゃないの？」

おっしゃるとおり、ここは文学館の欄です。というわけで、前置きが長くなりましたが、今回は今年出版界における古河ゆかりの人々の動向を少々振り返ってみたいと思います。

重要文化財指定ほどのビッグニュースではないかもしれませんが、今年は古河ゆかりの人々の作品が数多く世に出ました。年明け早々には光文社文庫から永井路子氏の「万葉恋歌」が再版されたのを皮切りに、3月には松本静泉氏の「歌集 白鳥の湖」（美研インターナショナル）が、4月には小林久三氏の「皇帝のいない八月」（新風舎文庫）が再版、辻弘司氏が「川柳句集 日向ぼこ」

（文芸社）を出版、5月には非売品ながら日向野英一氏が「小説青春幻想」（老樹舎）を出版しています。下半期に入っても7月には永井路子氏の「朱なる十字架」（文春文庫）が再版、8月には佐江衆一氏が「土魂商才～五代友厚」（新人物往来社）

を、9月には大正大学出版より永井路子氏と寺内大吉氏の対談集「史脈瑞応」が、10月には古河在住の本谷和美氏の絵本「のんちゃんうれしいな。とってもううれしいの」（文芸社）が、11月には粕谷栄市氏の詩集「鄙唄」（書肆山田）、「轉落」（思潮社）、小堀文一氏の「私の『夜明け前』」（フジペン社）が出版されています。

得たかぎりの情報だけでもこれだけ多くの作品

が出版されています。新刊あり、再版あり、小説もあれば詩歌、川柳とジャンルもバラエティーに富んでいます。皆さんもちょっと驚かれたのではないのでしょうか。文学館にとってもうれしい限りです。

茨城県下唯一の「文学館」のあるまち古河。来年は一体どんな「古河」が出版界を沸かせてくれるのでしょうか。そんな期待をしつつ今後もできる限り多くの情報を紹介していきたいと思います。



来年も今年同様、さまざまな「古河」で沸く出版界を期待しましょう...